

## 論文の和文要旨

論文題目	民族自己のバーチャル構築：スリランカ（2009－2018）のソーシャル・メディアにおける（シンハラ）内・外集団の視覚的形成
氏名	Kathri Achchige Sandunika Hasangani  カテウリ アチチゲ サンドウニカ ハサングニ

本研究は自民族中心主義 (ethnocentrism) を概念枠組みとし、内集団の習俗、文化、思想を基に内・外集団が形成される過程を検討することで、2009年以降のスリランカにおける民族的自己イメージの決定要素を明らかにする。過去の心理学理論では個人間変動（個人の性格傾向など）が個人の自民族中心主義の度合いを決定づけるとした一方、社会学理論の先行研究は様々な社会的、構造的、そして状況的要素（資源競合、脅威への認識、教育、所得など）が自民族中心主義を検証する上で重視されるとした。しかし、宗教性と自民族中心主義の関係については看過される傾向にある。このような問題点を踏まえ、本研究はシンハラ・コミュニティがソーシャル・メディアを介してオンライン上に公開する情報及び映像を検証することで、いかに宗教性が民族的自己像を特徴づけ、また外集団嫌悪に発展するのかを分析する。方法論として多項ロジットを用い、1) 民族的自尊心、2) 不寛容性、3) 非該当を三項に選択する。その上で説明変数に1) 脅威の認識（物質的・象徴的）、2) 宗教性（内的・認識上の外集団）3) 陰謀説を設定し、スリランカにおける自己民族主義の検証を試みる。

検証の結果、先ずスリランカ人の民族的自尊心は高いものの、前述した3つの独立変数との間には決定的な相関関係が存在しないことが判明した。次に不寛容性については脅威の認識との相関関係が最も強く、そのほか二つの独立変数との相関関係は（統計上関連性はありながらも）比較的弱いことが明らかになった。最後に宗教性については不寛容性との相関関係は弱いながらも、そのほか二つの独立変数との関係性は顕著に現れることが分かった。これらの結果はオンライン・コミュニティが創り上げる画像をもとに導き出したものである為、オンラインとオフラインの世界上に生じ得る存在論の隔たりを確認する一助となるであろう。結論としてシンハラが構築する自己イメージは必ずしも「宗教的シンハラ性」に帰するものでないがゆえに、宗教性は外的集団に対する不寛容性とは関係が低く、むしろ物質的・象徴的脅威の認識が外的集団に対する不寛容性に関わるシンハラの民族的自己イメージに強く影響することが判明した。

